

ピアノの本

1975 8 AUGUST

創刊号



ピアノの本 第一号（通巻第一号）昭和五〇年八月一日発行 発行所 東京都渋谷区神宮前四一二四一〇 〒150 草思社

定価 八十円

YAMAHA
日本楽器製造株式会社



W-101

自然の木だけがもつあたたかさが
伝わってくる、ウッドシリーズ、
5機種そろいました。

豪華で
個性的な
W-101

天然木化粧板
ローズウッド

シックで
落ち着いた
W-102

天然木化粧板
アメリカン・
ウォルナット

シンプルで
モダンな
W-103

天然木化粧板
チーク

あざやかな
色彩が映える
W-104

天然化粧板
ミンディ

堂々とした
風格の
W-105

天然化粧板
オーク

エッセイ
高橋アキ

私、現代、ピアノ



伯牙の琴

中国の秦の時代に「呂氏春秋」という本がある。その中に「伯牙絶絃」という話のっている。ここにその原文である漢詩を長々と書くわけにもいかなないので、かなり自由な訳を試みてみよう。

『昔、伯牙という琴の名手がいた。彼には鍾子期という友人がいて、彼の演奏のよき理解者であった。伯牙が琴をひきながら心は大きな山を想っていると、鍾子期は「いいなあ、君の演奏は堂々とそびえたっている大きな山のようだ」という。またある時は、流れる水を想って琴をひいていると、鍾子期は「いいなあ、まるでとうとうと流れる水のようにだ」と批評する。ところがその鍾子期が死んでしまった。すると伯牙は琴をこわし、二度と再び琴を演奏しなかった。なぜなら彼がその人のためにひこうと思えるような人は、もうこの世にはいなかったからである。』



目次

私、現代、ピアノ……高橋アキ………	3
一台のピアノ………岩田 宏………	8
C F 評判記(ランキ、アシュケナージ)………	12
幕間のピアノ小事典 船山 隆………	15
ワークラン女史にきく………	16
キャンパス拝見(大阪芸術大学)………	20
私のレッスン法………	24
ピアノの話題………	26
家庭でのピアノ管理………	28
「音」への配慮………	30
ピアノの知識(1)(ハンマー)………	31
表紙・国井 節	
イラスト・福田典高	

この話を讀んだのは私が中学生の時だった。当時の私にも、よき理解者だった友の死をいたむあまりに琴をたたきこわしてしまおうという、こんな激しい悲しみをなとかわかるように思った。けれどもそのあと琴をひくのをやめてしまったという段になると、どうにも納得できなかった。もしも伯牙が真の音楽家であるならば、たとえだれ一人としてわかってくれる人がなくても琴をひき続けるはずだ。人に聴いてもらうのも大事だけれど、究極は他人などはいらぬ余地のない、音楽と自分との問題しかないのだから、このように当時の私は厳しく伯牙を批判していたのだ。その頃からかれこれ十数年たった今考えてみても、この批判は全く間違っていたとも言えないように思う。演奏家であるということとは、音楽に対する絶えざる自己修練の連続にほかならないからだ。それはたとえば日本における「道」のように、悟りに到る道程みたに見えるかも知れない。

自己と他者と

しかし演奏家であるというのはそれだけではすまないのだ。ロビンソン・クルーソーならいざ知らず、この世の中に生きている限り音楽と自己との関係以外に他者とのぶつかり

合いがなければ演奏家とは言えないのではないだろうか。ただ自分の楽しみのためだけに演奏するというのなら話は別である。その場合には、自分が音楽から必要なだけ慰めとか、楽しみを一方的に受けとるだけでいいのだから、音楽と自分だけの関係ですんでしまう。けれども演奏家は、音楽から一方的に受けとるだけではすまされない。自己を高め、音楽に近づく努力が必要であり、またそれと同時に他者の理解を必要としているのだ。

だれ一人理解してくれなくても、「それでも地球はまわっている」と言えるような絶対的真実など演奏にありはしない。ある一つの曲を想定してみても、「すばらしい演奏」はあっても「これこそ唯一絶対の姿である」という演奏はありえない。なぜなら演奏は人間の理性よりも、まず感情に訴えるものだからである。

もっとも作曲となるとどうだろうか。今はだれもわかってくれなくても、後世の人はき



琴の時代の石印文字

つとわかってくれるだろう、と無理解の中で作曲に励むことは大いにありうることだ。二十世紀初頭、ストラヴィンスキーの「春の祭典」が初演された際、大スキャンダルとして人々のこうこうたる非難をあげ、トマトや卵を投げつけられた話はあまりにも有名である。その曲が今日では現代の古典として、名曲として位置づけられているではないか。またフオーレの数々の美しいピアノ曲だって、最初は難解であると決めつけられて、出版社の机のひき出しで何十年も眠らされていたという。それをマルグリット・ロンがくり返し演奏することによって、しだいに人々に親しまれるようになった。こんな例はいくらでもあるに違いない。またこのようにしてこそ、西洋音楽はその変化に満ちた豊かな遺産を誇っているのだらう。

音楽を聴くということはまず感覚の作業である。聴覚というものはとりわけ用心深くできていて、耳慣れない音楽を聴くとまず耳慣れないという、それだけの理由で拒否反応をおこしてしまい、それ以上その音楽に対する理解を進められないことが多い。もっともこうした反応は演奏に対してもあるだろう。極端な例では、ある一枚のレコードをくり返し聴くことによって、その曲イコールそのレコ

ードの演奏ということになってしまう。そして違ったタイプの演奏を聴くと耳になじまなために、それ以上考えることをせずにあれはよくない演奏だと決めつけてしまう。こういう危険性はよほど注意しないと生じやすいのではないだろうか。

最近ではジェット機とエレクトロニクスの発達によって、地域差、世代の差もなくなりつつあり、演奏も平均化してしまい強烈な個性などあらわれにくくなったと言われる。その中ではピアノリストのグレン・グールドなどは非常に個性的であり、しかもそれは深い音楽性と思考に裏打ちされている。けれども彼のレコードが初めて発売された十数年前には、彼の演奏は奇をてらった不自然な細工物であるとの見方が強かったのではなかったらうか。

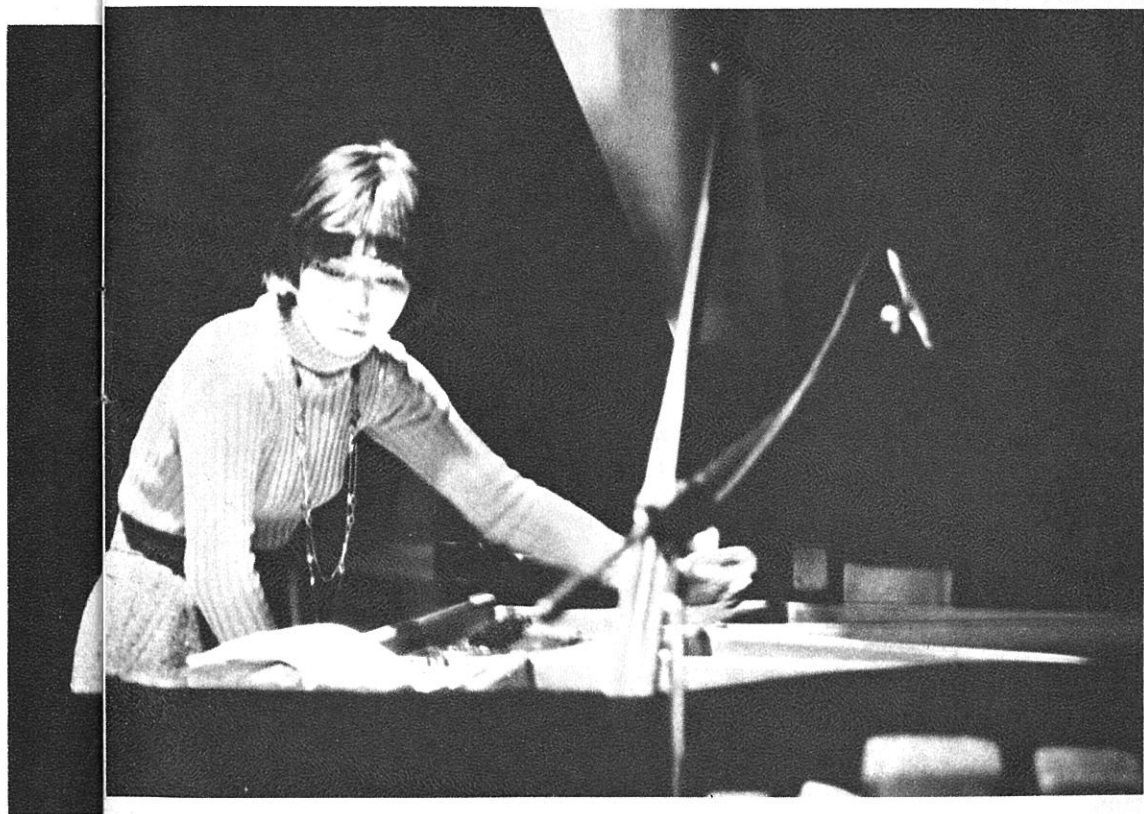
ピアノリストになるということ

ともかくこの漢詩を今でもよく憶えている位に、この話は中学生だった私にいろいろなことを考えさせたようである。怠け怠けではあったがピアノのレッスンにかよい、将来はピアノリストになろうなどと漠然と考えていた私は、その頃からこの社会に生きてゆく中で自分がピアノをやることにいったいどんな意味があるのか、ピアノでいったい何ができるのかと常に自問し続けるという苦しみを味わうようになってしまった。こんなに答のみつからない問いをくり返すよりも、いつそピアノをやめて社会に直接役立つような仕事を見つけて働いたほうが自分を生かせるのではないか、と何度思ったことだろう。

さてここで話を「伯牙絶絃」にもどしてみよう。伯牙が二千年以上も昔、鍾子期にどのような音楽を聴かせていたかは残念ながら知るよすがもない。ただ今日のように作曲家は譜面に音楽を書きとめ、演奏家がそれを見てひく、というような分業システムではなかっただろうと思う。そうすると、伯牙の演奏した音楽は作曲と演奏の一致したまきに伯牙だけの世界であり、それは凡人ではうかがいが知

実際中学生の時、一大決心をして家族にも話してピアノをやめてしまったことがある。やれやれ、これで大嫌いな練習から解放され

演奏会場での高橋アキさん



たとばかり感慨をこめてピアノのふたを閉じ、幸福感に浸ったのも束の間だった。以前からやりたいと思っていたあれこれをしていても、どうにも心がおちつかない。やめると決心して四、五日目にはもう哀れにも再びピアノのふたを開けてしまったのだった。

その後高校、大学、大学院と九年間も音楽学校に在籍していた間にも、思うようにならない自分との苦しい闘いの中で、ピアノをやめたいと一瞬思うことはたびたびあっても決心するには到らず今日までできてしまった。

しかしその音楽学校時代には、将来コンサート・ピアニストになりたいという、一見ロマンティックで漠然とした夢などはきれいさっぱりなくなっていた。それにかわって、ピアノを通して自分にできること、しかもそれが自分に合っていることをやってゆきたいという希望はますますつのるばかりだった。

現代音楽のコンサートにたびたびかよったのも高校から大学にかけての頃だった。当時ニュー・ディレクションという現代音楽のグループがあり、活発に活動していた。私はそのそれまで未知だった音響、その裏にある思考などに興味を持ちはじめた。そして作曲家や演奏家、そして聴衆までもが一体となって、自分たちの音楽に真剣にとりくんでいる姿に

とてもひかれた。そして自分もいつかこうした活動に参加して、その中で自分にできる役割を受け持たいたいものだと思うようになっていった。

しかし実際に同じ芸大の作曲科の学生の作品をみずから求めて演奏しようと思ってみたところ、初めはそのむずかしさに四苦八苦したものだ。今思えば無理もない。せいぜいブラームスまでのクラシックしか勉強したことのない私には、譜面といくらにらめっこをしたところで出てくる音響に耳がなじめず、手もついていかないのだ。もつともここであきらめてしまっていたら、今私は現代音楽をやつていなかったかも知れない。しかしその後一曲一曲苦勞して演奏することに譜面や音にも慣れ、なじんでくるとだんだん現代音楽をやるのがおもしろくなってきた。

現代音楽にひかれる

譜面といつてもいろいろある。歴史的に見てもモーツァルトよりベートーベンのほうが、ベートーベンよりブラームスのほうが譜面が複雑になっている。つまりそれだけ出てくる音響も複雑になってきて、簡単にはとらえにくくなっているわけだ。後期ロマン派から出発したシェーンベルクの譜面はブラームスよ

り更に入り組んでいるし、一九四〇―五〇年代のブーレーズやシュトックハウゼンになると、一つ一つの音が強さ、長さ、音色も、もちろん高さもバラバラに細分化され、それらが組み合わさってできているのだから譜面は全く難解である。その反動として六〇年代には図形楽譜があらわれる。演奏家にほとんどすべてを委ねてしまおうという、いわゆる「偶然性」の音楽である。そして今日では再び五線記譜法にもどっているのが大勢のようである。ともかく現代音楽はクラシックと違って、事前にそれがどんな音楽なのか想像もつかない。それを自分で手探りで見つけてゆく。もしもそこにすばらしい何かがあったなら、それを発見した時のよろこびは何物にも換え難い。

一方、現代音楽にとって一人一人の演奏家がいかに責任ある存在であることだろう。月光の曲がいいかげんに演奏されたところで、ベートーベンを非難する人はいないだろう。しかし未知の現代曲をもし演奏家がいいかげんにひけば、作品が批判されてしまうのだ。もちろん一口に現代音楽といってもさまざまな傾向があるし、その中にはくだらない曲だってたくさんある。しかしそれはあたり前

なのだ。歴史のふるいにかけられて残った昔の作品とはわけが違ふ。だから私も一演奏家として、それらの中からすばらしい作品を私なりに見つけ出し、演奏することによってそれらの音楽を少しでも人々に知ってもらい、理解してほしいと思う。そうして音楽の新しい可能性を発見してゆきたい。これは音楽を愛している一人としての私の願いでもある。

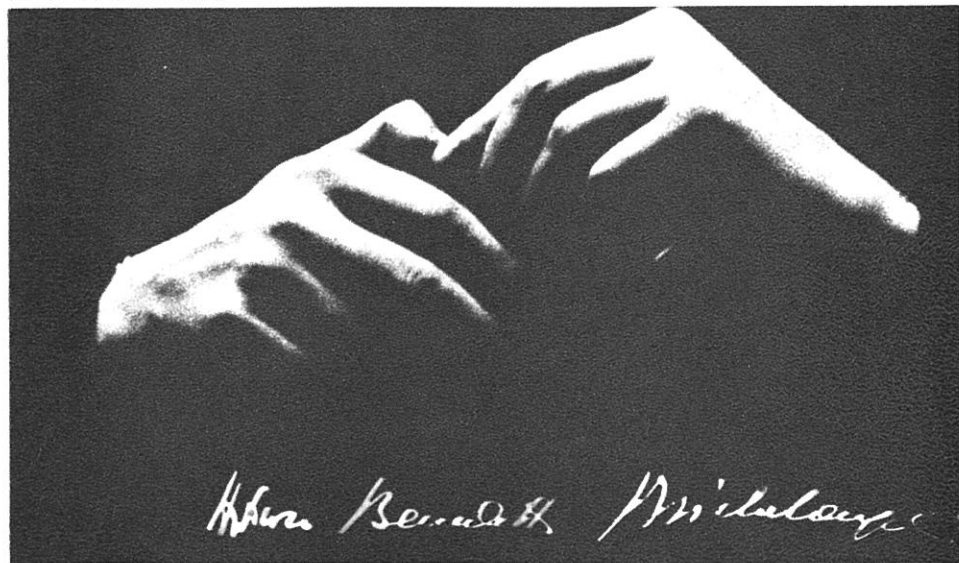
現代音楽は一人のピアニストにさまざまなことを要求する。ピアノの鍵盤だけでなく、弦も含めた内部にある時は打楽器奏者のように、ある時はハーピストのように演奏したりもする。またほかの鍵盤楽器、チェレスタ、電気ピアノ、いろいろな種類の電気オルガン、オンド・マルトノなども演奏したし、声を使う作品もいくつあった。私はそれらを樂しみ、そこから多くのことを学びました。これからはシンセサイザーもいじってみたいと興味しんしんである。

けれども私はピアノから離れることなどともできないだろうし、実際私が最も愛しているのは八十八鍵の鍵盤をひくことなのだ。この一見限られた可能性の中に、私はいつも無限の想像力の飛翔を感じている。

一台のピアノ

岩田 宏

A、B=ミケランジェリの手



私の父は昔の鉄道官吏で、母の話によれば地味で穏やかで辛抱強い、下級官吏の見本のような人だったらしい。この父が生涯の終りに近く突如として、比較的派手なことを二つやってのけた。その一つは、恐らく誰かにそそのかされてだろう、株に手を出したことであり、もう一つは長女にせがまれてピアノを買ったことである。株のほうでは大した損も得もなく、父の死後に残された有価証券は十五年戦争の進行と敗戦によって紙屑同然になったが、一台の小さな堅型ピアノは、空襲で焼かれて滅びたあとも、永いこと子供たちの内側にその影を落しつづけた。「芸術は永く」という言い方はこの際あてはまらない。わが家で音楽家あるいは音楽関係の専門家になった者は一人もないのだから。むしろ楽器そのものにまつわる一種超越的な雰囲気のようなものがここでは問題なのである。

実際、ピアノの燃え殻は、金庫や箆の燃え殻とは全然ちがう、なにやら異様な痛ましきを見る者に感じさせる。それは、木製の部分がすっかり燃え落ちて外形が一変してしまうことと無関係ではなさそうだ。まだくすぶっている余燼を踏みながら近寄って見れば、数十本の金属弦がいじけた植物の蔓のようにからみついた突兀たる骨組が立っている。そこだけが辛うじて原型をとどめている鍵盤の象牙は、指で触れるとカルメ焼きのように崩れる。これはもう曾てピアノと呼ばれていたものではなく、何か用途不明の道具の残骸であり、悪意に満ちた怪物の死体のようにも見えるのだった。昭和二十年二月の

この光景を今でも私はありありと思い浮べることができ。それは精神分析でいうところの「トラウマ」となって私のどこかに刻みつけられたようでもあり、あのととき焼け跡へ見に行かなければよかったと悔むことがしばしばである。いずれにせよ、このようにしてわが家のピアノは約十年の短い生涯を過ごしたのだった。

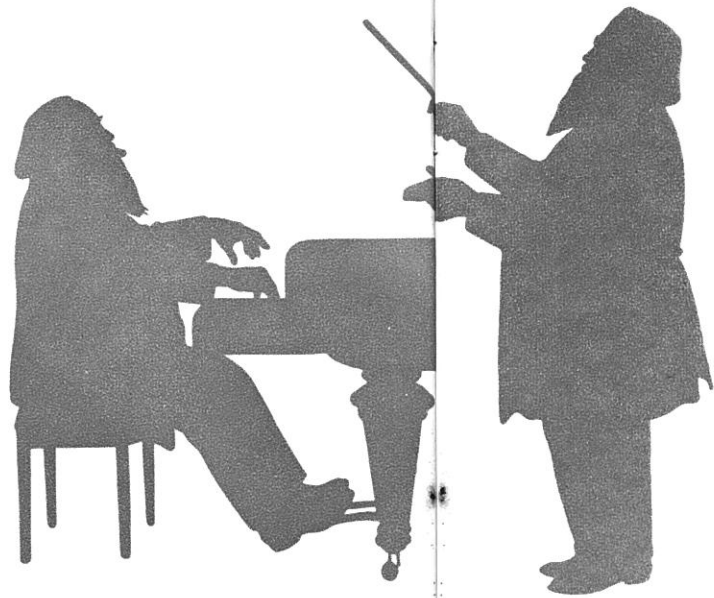
いうまでもなく、昭和十年代初期のわが国におけるピアノの普及率は、非常に低かった。国産ピアノの生産台数は現在とは全く比較にならぬ程度だったに違いない。そしてもしも当時のピアノ保有家庭の分布図を作ったとすれば、本州の三つ四つの都会への極端な集中現象を示す図ができただろうと思う。そんな頃、札幌郊外の貧乏官吏の家に新しいピアノが入ったということは、隣近所の人たちにどんな波紋を投げかけたか、容易に想像することができよう。ある寒い日の昼さがり、白い割烹着に「愛國婦人会」の襟をかけた主婦たちが二十名余り、わが家の応接間に勢揃いしたときのことを、私はおぼろげながら記憶にとどめている。その三、四日前から、母は困った困ったを連発しながら、家事の間隙を縫うようにして応接間のピアノにむかい、長女の助けをかりて「愛國婦人会の歌」の楽譜ととりくんだのだった。両手のユニゾンでメロディを弾くだけの、ただたどしい「伴奏」に合せて、主婦たちがようやく歌えるようになったあとは、ひとしきりお喋りや笑いが続き、やがて玄関先で記念写真を撮ることになった。遠慮して逃げまわっていた母は結局、最前列の中央に押し出され、いささか得意そ

うに見えた。玄関先はまだ一面の雪だったから、雪の白と、割烹着の白と、襟の白とは相俟ってひどいハレーションをひきおこし、どの主婦の顔もなんだか凄まじい形相に写ってしまったこのときの写真は、今でも子供たちの誰かの家に保存されている筈である。

昭和十三年に、わが家はピアノごと札幌から東京へ移った。この頃すでに音楽学校の師範科を出て、まもなく結婚した長女を別とすれば、わが一家の音楽生活は以下のような状態であった。父亡きあとの経済の支柱とならざるを得なかった長男は、いくらか疲労気味で、日曜日など、末の弟に伴奏をさせて、大げさなドイツ語の発音でシューベルトの「さすらいびと」を唸った。兄弟の中では一番成績優秀で海軍兵学校に入った次男は、いかにも律儀なピアノ学習計画を立て、休暇のたびに飽きもせずハノンの最初のほうをくりかえした。中学生だった三男は、担任の教師が当時の風潮に乗って、日本芸術の真髄はその間や空白部分にあり西洋芸術には空白を活かす精神がないと説くのを聞くや、たちまちいきりたつて、ベートーヴェンの交響曲にしばしば見られるG・P（全休止）を引合いに出し教師を反駁するという、多少とも高級なことを仕出かした。体の弱かった次女は女学校で習った巧妙な訳詞つきのブラームスの「日曜日」に取らずに置いて来た山陰の小白合、人が見つければ手を出すだらう……を愛唱した。小学生の三女は「夏も近づく十八夜」を歌いながら、座敷のまんなかにひっそりかえり、ばったのように折り曲げた片足のふくらはぎと腿の

間にてのひらを挟んで、きゅっきゅつと耳障りな音を立てた。そして末弟の私は、どういうわけか、この子こそは本物のピアノニスト及至は音楽家になるに違いないという一家の輿望を一身に担い、自分でも、そうなるのが当然だといわんばかりの自惚れと幻想に生きていた。

このような妙な思い込みや謂れなき期待は大抵は取るに足らぬ些末事が発端であって、わが家の場合それはやはり楽器そのものが原因だったと見なければならぬ。つまり、初めに書いたように、楽器にまつわる超越的な雰囲気と、楽器の思いがけない出現に由来する緊張や自負である。それにしても、冷静な目であたりを一わたり眺めてみれば、ここが天才音楽家の育つ場所であるか否かはすぐ分つただろうに、と今の私は可笑しくてたまらない。わが家の居間、兼、客間、兼、寝室の六畳間には巾の狭い縁側が接続していて、その縁側にピアノは鎮座しましたし、ガラス戸と雨戸を隔てた外は、小さな防空壕一つをやつと掘れる程度の庭で、背の低い塀の向うは、溝を間に挟んで、すぐバス道路である。安普請の家全体



あろう。家の者はみな笑っていたが、私はこのさみしそうな工員が示した媚態に鼻白む思いだった。あたりの何もかもが音楽と正反対の側を指しているというのに、どうしてそれほど感傷的になれるのか。もうじきここには大小さまざまな爆弾が降ってきて、人が大勢殺されるだろう。私はもう音楽をやめようかと思っている。あなたもいつそ音楽のことは忘れなさい。音楽などはだれか幸福な人に預けて、どこかへ歩き出しなさい。——私はその工員にこう言いたかったのである。

この浅墓な考えが逆方向から痛棒をくらったのは、実に三十数年後のことだった。わが家であだ一人の音楽学校卒業者である長女は、結婚して暫く中国に住み、昭和十八年頃、母親を数週間ほど中国へ呼んだことがある。帰って来た母の手を通じて姉から私に一冊の楽譜が贈ら

をゆるがしてバスが通りすぎるとき、ピアノからバスまでの直線距離は五メートルに満たない。もちろん当時のピアノ生産台数と同じく、当時の自動車の生産台数もまた今とは比較にならない程度だったから、路線バスの往来を別にすれば、この道路の騒音公害はだれの話題にもなり得なかった。なにしろ牛車や大八車やリヤカーが少しも珍しくなかった時代であり、場所である。またそんな場所と時代であればこそ、いつのまにか軍需品の下請け工場が簇生し、ミルクホールが一軒しかなかったバス道路沿いの商店街に「産業戦士」めあての一杯飲み屋が目立ち始めたのだろう。ある晩、八時頃、私がピアノを弾いていると、外から帰って来た母が蒼白な顔をして、庭にだれかがいると言う。血気にはやる三男はすぐ木刀を握んで飛び出して行き、私は窓から様子をうかがった。庭に立っていたのは痩せた茶葉服姿の男で、三男に誰何されると、少しふらふらしながら斜めに空を叩いて言った。

「いい月夜ですね。今弾いていたのはベートーヴェンでしょう」

月夜、ピアノ、ベートーヴェンと揃えば、だれでもすぐ思い出すのは例の「月光の曲」にまつわる伝説、あの盲目の少女が登場するお伽話である。だが現実には腕白ざかりの私と、酔った「産業戦士」と、荒れ始めた街があるばかりで、しかもそのとき私が弾いていたのはモーツァルトだった。これらの駒をどう当てはめ、どう並べ換えたところで、伝説と現実との落差は歴然たるもので

れた。それはブラームの作品七九の「二つのラブソディ」で、余白に姉はこう書きこんでいた。

へこの二番は私も弾きました。きれいな曲です。弾いてごらんなさい」

こういうかたちで誰かから楽譜を貰ったのは私には初めての経験であり、この小さな出来事は私の記憶にくつきりと捺されたように残っていた。さて戦争が終り、姉夫婦は収容所に抑留され、殆ど無一文で引き揚げ、三人の子供を抱えて悪戦苦闘するという、大多数の引揚者の歩んだ道を辿らざるを得なかった。そしてつい先達て、生活の波瀾が減衰するのに反比例して体重が増えてしまった姉と昔話の最中、私はふと思ひ出してこの楽譜の一件を持ち出した。姉は言った。

「そう？ そんなことがあった？」

私はすぐさまピアノにむかい、作品七九の二番の冒頭の部分を弾いてみせた。だが私が驚愕したことには、楽譜を私に与えたことのみか、自分が曾て弾いたその曲自体までも、姉はきれいに忘れていたのである。それは思ひ出したくないことについて忘れたふりをするとか、おぼろげに覚えているがどうもうまく思い出せないとかいうのではなく、まことにみごとな、拭かれたような忘却ぶりであった。そしてこれだけのことで天下の一大事に遭遇したように驚き考えこんでしまう私は、自分が依然として死んだピアノの影の中で生きていることを認めないわけにはいかなかった。

ピアノ・リスト

C

F

評

判

記

海外から毎年たくさんの方々が日本を訪れます。そのピアノリストたちに日本製のピアノ、ヤマハCFはどんな風に受取られているのでしょうか。

デジェ・ラーンキ

デジェ・ラーンキというピアノリスト、日本ではまだ馴染みの少ない新鋭ですが、今回の初来日は大変に高く評価され、鮮やかな印象を残しました。

一九五一年にハンガリアのブダペストに生れ、ベラ・バルトーク音楽院、フランツ・リスト音楽アカデミーでピアノを学び、十八才ですでにロベルト・シューマン国際ピアノコンクールで第一位を獲得、以来世界各地でその才能を賞讃され、



ヤマハ・ホールでCFを弾くラーンキ氏

一九七三年にはハンガリー国家から「リスト賞」を与えられる、という輝かしい経歴の持主です。日本でも得意のシューマンやショパンの他、ベートーヴェンやハイドン、バッハといった古典派の演奏も披露しました。若々しさの溢れた音楽性と安定したピアノリズムを備えた演奏はてらいがなく、好感のもてるものでした。このラーンキ氏の五月十三日のリサイタルはヤマハホールでCFを使って行なわれました。曲目はハイドンのソナタ、シューベルトの「さすらい人」幻想曲、リスト、ショパンの作品とバルトークの組曲、というもので、会場は文字通り満員で立席も出るほど。

この日のCFはラーンキ氏にどんな感想を与えたでしょうか。インタビュアーを申し込むと「口では説明しにくいので、またあの同じピアノを弾きながら感想を言いたい」と、コンサートの三日後にわざわざ再びヤマハホールへ出掛けてきてくれたのです。

ホールのステージで、なれた手つきでアクションを引き出し、ハンマーをいろいろ調べてみたうえで、こう語ってくれました。

「ヤマハのアクションを見たのは、これが初めてなのでとても面白いな。ハンマーのフェルトは何を使っているの

よう。ヨーロッパのとは材質が違うようです。アクションは全体になめらかで素晴らしい。弾いた感じでは、音色がとてもきれいです。特にベースがよく響いて美しい」

素顔のラーンキ氏は、音楽院ではずいぶん熱心にピアノひとすじに勉強した秀才ではなかったろうか、と思わせる雰囲気の人でした。静かな口調で、ひとことひとこと確かめるような話し振りに、誠実さが感じられます。ピアノのことから少しはなれて、氏がリサイタルで生き生きと演奏した、バルトークのことなども聞いてみました。

「ええ、バルトークの曲は私にとってはとても自然に受け入れられる音楽です。同じハンガリア人ですし、私たちの音楽、という気がするんです。もちろん彼は楽譜に自分の意図を正確に伝えるよう、こまかな指示を書き入れています。強弱やテンポなど、楽譜に書かれているそのま

まを忠実に弾けば良いわけで、それ以上

に弾く必要はないのです。バルトーク自身のレコードでは、彼は非常にシンプルに弾いています。彼の作品は矢張りハンガリアの民族音楽や性格、メロディが基礎になっています。

ハンガリア人の性格ですか？ 日本人と同じアジアから生れた民族ですけれども……よく言われるのは「ラプソディ」に代表されるような情熱的な性格、というのですが、どうでしょうか。僕自身？ ウーン、そういうところもありますね。ピアノリストにとって大切なのは（これは音楽家にとって、と言い換えますが）、自分で演奏するだけでなく、他の人の演奏をよく聴き、新しいものを吸収して行くこと、です。とにかく音楽にはこの人生にあるものの全てがあり、だから音楽家には全てが大切なのです。何でも知ろうとする好奇心と柔軟な心を忘れたくありません。「これは嫌いだ」と初めからきめつけられないようにしたいですね。深く知ると良さがわかって好きになることもありますから」。

ア

アフェクテンレーレ Affektenlehre【独】

〈情緒論〉とも訳される17・8世紀の音楽理論の体系で、音楽をつねに〈悲しみ〉や〈喜び〉などの情緒や感情に結びつける考え方。この理論の代表者C.P.E. バッハは、〈よい演奏とは、歌いまたひくことによって、楽想をその真の内容、情緒に即して聞かせることである〉と定義している(《正しいピアノ奏法》東川清一訳参照)。きわめて古めかしいと同時に、永遠に新しい音楽のドグマ。

アラベスク Arabesque【仏】 シューマンのピアノ小品作品18(1839)とドビュッシーの2曲のピアノ曲(1888)のタイトル。語源的には〈アラビア風の〉という意味で、左右均衡のアラビア模様をさす。印象主義の作曲家ドビュッシーは、この言葉に特に愛着を感じ、多くの文章のなかで〈神聖なアラベスク〉の深い魅力について論じている。このドビュッシーのアラベスク観は、世紀末芸術全体の装飾的な様式——〈支那そば様式〉〈サナグ虫様式〉〈うなぎ様式〉——と共通の基盤のうえに成立している。ドビュッシーの〈長い髪〉に対する異常な関心も、こうした世紀末の一般の雰囲気と無関係ではない。自由で流動的な線の運動は、夢と幻想と想像の音楽を作る。

アルベルティ Domenico ALBERTI (1717?~1740?) イタリアの五流作曲家。ド・ソ・ミ・ソ=ド・ソ・ミ・ソの分散和音を乱用することによって、〈アルベルティ・バス〉の創始者の地位を獲得した。しかしこの分散和音はアルベルティの創造したものではない、またアルベルティが存在しなかったとしても必然的に利用されるようになったであろう。

アレア Alea【羅】で〈サイコロ〉を意味し、一種の限定された偶然性による音楽を〈アレアの音楽〉(aleatory music【英】aleato-

rische Musik【独】musique aleatoire【仏】)とよぶ。サイコロを使って演奏の順番を決定するという〈サイコロ音楽〉の例は古くから存在し、モーツァルトも《音楽のサイコロ遊び》という作品を作曲したといわれている。しかしこの一種の管理された偶然性の音楽は、20世紀の後半になってきわめて重要なものとなった。シュトックハウゼンの《ピアノ曲第11番》(1957)では、ピアニストが、一枚の大きな楽譜に書かれた19個の断片を自由に選択するように設計され、またブーレーズの《ピアノソナタ第3番》でも、迷宮のように書きこまれた多くの断片を自由に選択するという設計がとられている。演奏家の自由を回復するための〈賭〉であるが、はたしてサイコロの目はどうなるか。

イ

インヴェンションとシンフォニア J.S. バッハが教育用に作曲した30曲(BWV772-801)。バッハは次のような序文をつけている。〈クラヴィアの愛好家、とりわけ学習希望者が、(1)2声部をきれいに演奏するだけでなく、さらに上達したならば、(2)オブリガートの3声部を正しく上手に処理すること、またそれと同時に、すぐれた着想(インヴェンション)を得て、それを巧みに展開すること、そしてとりわけ、カンタービレな奏法を身につけ、それとともに作曲の予備知識を得るためのはっきりした方法を示す卒直な手引き。〉バッハは長男フリーデマンのためにこの手引きを用いたが、原典資料によれば、現在の《インヴェンション》の配列の順にはなく、以下のような順番で練習させたという。したがってこの順列が《インヴェンション》の理想的な練習順番ということになるだろう。ハ長調・二短調・ホ短調・ヘ長調・ト長調・イ短調・ロ短調・変ロ長調・イ長調・ト短調・ヘ短調・ホ長調・変ホ長調・ニ長調・ハ短調。

ウラディミール・アシュケナージ

アシュケナージがいよいよ初めてヤマハのCFをステージで弾きました。現在、世界で最も高い評価を受けているピアニストの一人ウラディミール・アシュケナージは今回で五度目の来日。スケールの大きな演奏には、ますます精神的な深味が加わったようです。「聴き手とのコミュニケーション」を大切に考え、「それには作品と作曲家に対する深い内面的な共感と、その共感を表現する力が必要」と語るアシュケナージの姿勢はそのまま演奏からも伝わってきます。今回は指揮者としてモーツァルトの交響曲40番と二つのコンチエルトの演奏会も開き、注目を集めました。

世界各地のコンサートでもヨーロッパ製のピアノしか使ったことはなく、浜松市民会館のリサイタルが、ヤマハ・CFを使う初のステージとなりました。当夜のプログラムはベートーヴェンのソナタ二曲と、ショパンの24の前奏曲集全曲。いずれも美しく、ずっしりと重みのある演奏でした。演奏会のあと、エネルギーをつかい果した、といった表情のアシュケナージ氏は、それでもピアノのことに



浜松市民会館のアシュケナージ氏

なると顔をほころばせ、嬉しそうにこう語ってくれました。

「本当にとっても良いピアノでした。調整が完璧にできていますし、弾き易く、音もすごく美しい。柔らかなで、特にピアノシモがきれいですね。低音部もよく響いて申し分なかった。ピアノではね、私は特別な好み、というのはなく、客観的にみて良いピアノが良い。まあ当り前のこと

ですけれど、アクションのバランスがよく、美しい音色があれば幸せですね。ひとつつけ加えると、ピアノ自体の良し悪しももちろんだけれど、それと同じ位、ピアノの保管が大きな問題になると思います。保管の仕方を知らなくて、ピアノを良い状態に長く保つことができていないホールが時々あるけれど、これは全く残念なことです」。

ステージが終わると大勢のファンにどつとり囲まれ、サインをねだられるアシュケナージ氏。一人の女学生が白いブラウスの袖にマジックでサインして、と頼むと、困ったような顔をして「お母さんが嘆くよ」とペンを置いてしまいました。「かまわないから」と更に迫られ、「全く、クレイジーだね」としぶしぶサイン。傍らでパパの様子を面白そうに見ていたナディアちゃんは思わずふき出し、「どこの会場でもシャツとかハンカチとか腕とかにサイン欲しがらる女の子がいっぱい。こんなこと日本だけよ。この間なんかお皿にサインしてくれて言われてたの」といかにもおかしそう。

やっとファンから解放されて、「さあ、天プラを食べに行こう」と三人の子供たちの先頭になってホールを出て行ったアシュケナージ氏は、いかにも良き「一家の首領」といった感じでした。



●元パリ音楽院教授
マルセル・ウー克蘭女史にきく

ピアノにも エスプリを



マルセル・ウー克蘭女史は、ヴラド・ベルミュテール氏と共に、一昨年引退するまでパリ音楽院で22年間、ピアノの教鞭をとっていました。日本にもたびたび来日して、各地の音楽大学でピアノのレッスンをこなしています。厳しい反面、暖かい人間味のあふれた先生です。フランスと日本で教える機会を持った先生に、フランスでの教え方、日本とのちがいなど貴重なお話をうかがうことができました。率直で歯切れの良い話し方はいかにもフランス的です。

フランスでの教え方

——まずパリ音楽院のお話をうかがいたいのですが。

H 音楽院に入る前に、14才の頃から入れる予備校があって、2人ずつのクラスがあります。このクラスの優秀な生徒が音楽院に入ります。音楽院のピアノ科は生徒15人ずつ、10クラスあって、各クラス最高4人ずつ外国からの留学生がいます。授業は演奏の他に音



パリの音大生たち

楽史、理論を教えますが、一般教養的なものはありません。

——留学生で一番多いのは？

H 日本人(笑)。私にもずいぶん日本の教え子があります。給費留学生試験はとても難しいのですが、日本人はよく受かりますね。ただ入学してからピアノは別として、言葉の関係で楽典や音楽史では苦労が多いようです。それと下宿探しが大変なんです。これはフランス人の学生も同じですが、ピアノを置かせてくれる安い下宿がなくて。まあ女子には寮もあってまだ良いのですが、男の学生はそれこそ大変。ピアノ弾いていると近所の人からうるさがられたり。女子にくらべて男子の数はずっと少ないですけどもね。

——下宿探しの苦労はいつも同じですね。

ところで、日本では初歩の人たちにはバイエルとかハノンとかを教えるわけですけど、フランスではどうなのでしょう。

H バイエル、ハノン！ テリブルですね。

私は大反対。私の生徒たちにも自分が教えるようになってハノンなどは使わないようにというくらいです。私は子供の年令、手の大きさ、才能によってそれぞれに適した譜を私自身が紙に書いて渡します。その方が個人にあった教え方ができる。そして譜が読めるよ

うになったらバルトークの「ミクロコスモス」第1巻を使います。あれは素晴らしい作品です。それからなるべく早い機会にバッハを弾かせるようにします。バッハは一番大切。

ポリフォニーにはバッハを

日本では何でも弾かせるけれど、バッハはあまりよく教えられていないようですね。ポリフォニーが充分身につけていない感じですが、ポリフォニーを修得するにはバッハ、バッハ、J・S・バッハです。日本ではバッハを弾くことは弾いても、音が混り合っただけでいいです。右手、左手と別々に独立して弾けないといけません。例えば平均律の1番。右手の旋律のあとで左手の旋律がでてくるけれど、その左がちつとも聴こえてこない。ポリフォニーが不十分、というのはそういう意味です。

それはテクニクの問題ですか？

H テクニクと音楽性とは切り離せません。一般的にいつて、日本のピアニストは指はよく動きます。軽く、早く、器用にこなすけれど、それとは別問題。手に筋肉がついていないんです。私の手、触って「ちんないさ」(本当に硬く、がっしりしている)。筋肉がつかないと、ピアノもしつかり弾けない。最近のピアノはますますタッチが重くなっています

ますか？

H はじめの段階から、フリーズに気を配ることですね。メカニクに暗譜でパツパツと弾いてしまわないで、いつもなにかを形造つていくような気持ちで弾くこと。歌わせること、曲を感じることでですね。きのう、ブルーノ・レオナルド・ゲルバーのリサイタルに行ったのですが、演奏会のあとでゲルバーが「ピアニストは1秒に50回くらいキイを打てないとね」と冗談いつてから「でもあまり練習させないように。練習を強調しすぎると数年で全部ダメになる」と言っていましたよ(笑)。

でも日本の土壌にはとても良い可能性がります。例えばアメリカよりずっといい。アメリカには拔き出た人はいないけれど、一般的にはガツツと低いですね。教え方もひどいの。音楽もピアノも知らない人が教えてることが多くて。でも、日本にはいい先生がいま

「いい先生」、「いい生徒」

—その「いい先生」とはどんな先生ですか。
H 良い信念を持っていて、自分でもうまく弾ける人。一般化はできませんが、いい先生は人間的にも輝きがあるんです。焔が感じられるんです。そういった人間性が滲み出る



パリ音楽院の中庭



留学生のアバトマン

からね。私の先生のラザール・レヴィ教授も「日本人は手に筋肉がついてないね」といつも言っていました。右、左独立したポリフォニーを弾くためにもこれは大切なんです。

テクニクが強調されすぎる日本

—さきほど、ハノンやバイエルがテリブルとおっしゃったわけは？

H それも同じ手の問題なんです。左右、独立した手の訓練ができないからです。音楽的にもよくないし。右手のメロディを強調して、左手を軽視しているでしょう。フランスではハノンなどは地方の先生は使っているかも知れないけれど、もう殆ど使われていません。

先生は一人一人違った教授法をとっています。日本とフランスで教えられて、気付かれた点は？

H この国でも才能のある人はいます。でも一般的にここではテクニクがすこし強調されすぎているように思います。音楽性、とくにフリーズの問題に対してまだ配慮がたりない気がします。すごくうまくて、14才位で難曲を完璧にこなしてしまう子がいて驚きますが、でも少しロボットみたいな。機械的な感じなんです。

—音楽性を身につけるためのご忠告はあり

ようではないと他人にも何かを与えられません。では「いい生徒」とは？

H 才能、可能性、記憶力、知性があり、それらが総合されて備わっていること。才能があっても知性がない、またはその逆でもやはり伸びません。これは先生と同じですね。焔が感じられる生徒、ピアノだとがぜん雄弁になる生徒っていますね。

—日本のピアニストは20才まではぐっと伸びるけれど、その先があまり伸びないと言われていますが。

H ある先生にも同じようなことで、「日本人はどうも頭うちだが」といわれました。それも「焔」の問題でしょう。機械的なテクニクの問題がでてるんじゃないでしょうか。どうしてもある程度まで行くと、平均化されてしまうのです。

正確でうまく弾けるある日本人の生徒に、「これからはピアノ以外のことに目を向けなさい。あなたは少しピアノを弾き過ぎです」といつて絵画や彫刻をみたり、文学を読んだりすることを勧めました。ラヴェルやドビュッシーを弾くにはフランス文学を味わうのも大切ですからね。あまりコチコチにならないこと。ユーモアの精神も必要なんです。音楽には。

キャンパス拝見①

Osaka

大阪芸術大学



野外ステージもある噴水池のまわりで



緑濃いキャンパス

「ぜいたくな大学」、これが大阪芸術大学の第一印象だった。緑の深い金剛山のふもと近く、12万坪という広大な敷地をもつ、というだけでも東京のほりつばい環境からみると羨ましい。キャンパスに入ると、小鳥の声に混ってさまざまな管楽器やピアノの音色が耳に入ってくる。池のまわりでは、木もれ日を浴びながらスケッチに余念のない美学生の姿もチラホラ。近代的な校舎と周囲の自然がうまくとけあって、象牙の塔、というよりも緑の学園といった感じである。

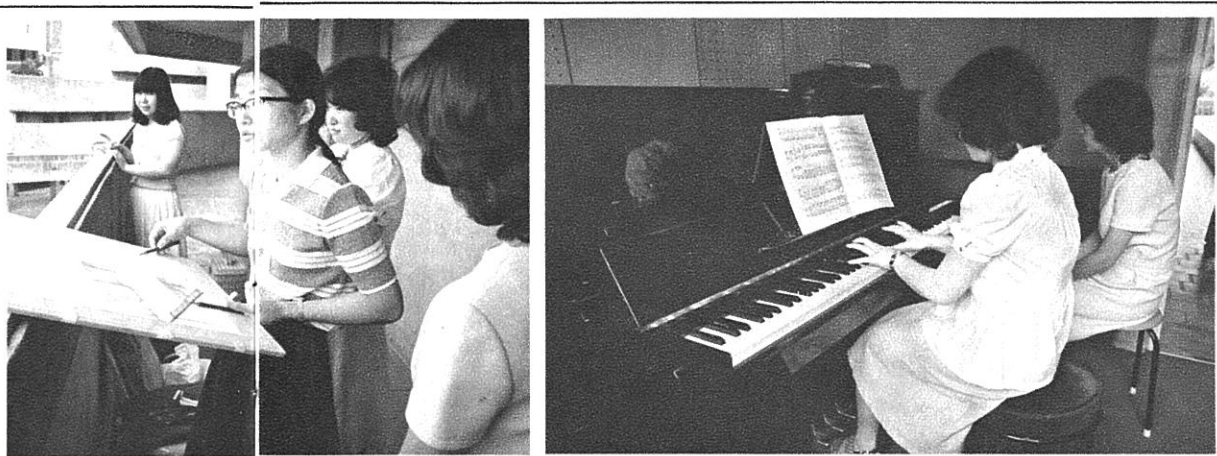
この大阪芸大の前身は浪速外国語学校。本格的な総合芸術大学としてスタートしたのは今から約8年前なのでまだ芸大としての歴史は若い。外国語学校から始まった、という前身のためか、今でもどこかハイカラな感じが残っている。音楽部の方で、思い切ったグレード制を採用している、というのも新しい大学ならではのことであろう。

美術、デザイン、工芸、写真、建築、放送、舞台芸術などの学科とならんで、音楽の部門は現在、音楽学科、音楽教育学科、演奏学科の3つにわかれている。音楽部門が出来た当時、専攻生は全部で30人位。それが8年後

の今では音楽をこころざす学生が約1千人余り、という大世帯にふくれあがっている。「こんな急速の伸びも珍しいでしょう。それに質的にも年々レベル・アップして来ている」と先生方も鼻が高い。

恐怖(?)のグレード制

この演奏学科(ピアノ、声楽、管楽器)の大きな特徴はなんといっても1級から10級までに能力別にわけられるグレード制である。それぞれの級ごとに、練習曲、対位法作品、ソナタなどの大曲、と3項目の課題曲がきまっています。入学と同時にふりわけテストが行なわれ、学生各自のグレードが発表される。そして学年には関係なく、各学生は自分のグレードのレベル・アップに専念する、というわけである。ピアノ専攻では大体4級から上ということになるが、うっかりすると他の専攻の学生の方が上級にいたり、勉強いかなんでは級の格下げ、もあるとか。なんともハタ目にはキビシイ、と感じられてしまう。しかもお互いのグレードはすっかりわかってしまいうけだから、学生たちにとっては「恐怖のシステム」ではないかと勝手な想像も湧いてくる。実感として、ひとこと、とおそれるおそれる経験者に尋ねてみると、「それは全然あ



レッスン室



音楽工学部のスタジオ

般教養科目は、全学科共通で同じクラスで授業を受ける。また、本人の希望次第で、他の学科の授業ものぞくことができる。「他の学科の人たちと触れ合うことができたのは、大きなプラスでした。音楽の方は女子が多いけれど、美術なんかだと男子が多くて、その間でカッパルがでたりするんですよ」という声も聞いた。「それがこの大学で得た最大のことであったりする人もいるでしょうね」と天野先生も笑う。「理想としては、ピアノにしても技巧にばかり走ったり、視野を狭くしないで、幅の広い芸術性を身につけていって欲しいんです。音楽バカには育てたくない。ここではその理想を実現できる可能性があると思います」と先生は真剣な顔で話を続けられました。

「環境は良いし、設備も良いし、全体にすごく明るい」という新入生の感想通り、校内を案内していただくと、その行きとどいた近代的な設計に驚かされた。音楽を専攻する学生にとって最も大切な練習室は個室が63室。

それぞれの部屋にアップライトピアノが1台ずつ入っている。そしてグラランドが2台ずつ並んでいるレッスン室は50室。各部屋とも冷暖房完備で、じゅうたんが敷きつめられ、もちろん防音設備は完璧。この練習室は1時間30円で誰でも借りることができる。これだけあれば、学生も朝早くから必死に予約をとらなくても、余裕をもって練習にはげめるのは当然である。そして外国の劇場風なバルコニーのついたホールは、演奏会々場の雰囲気です。練習できるように、と設計されている。客席は少ないが舞台が広く、演ずる側中心につくられていて、音響効果も最高。コンサートグラランドが3台入っている。

本格的なスタジオ

音楽関係の設備のなかでもひとときユニークなのが、音楽工学科用のスタジオ。ここにはNHKの電子音楽スタジオと同規模の機械が揃っている。ミキシング用の機材、電子音

りませんね。みな、ざっくばらんやし、良い友達も大勢できたし。ガリガリしてないんです」(今年この大学を卒業して、現在ここでピアノ伴奏の副手をしている下村美代子さん)「うん、自由な雰囲気。レッスンも厳しい気はしません」(今年入学したての山田悦子さん)という返事がかえってきた。

「練習曲ではテクニクを、対位的作品では古い作品の解釈を、ソナタなどではそれらを総合した音楽性を、とバランスのとれた教育法を考えています」(演奏学科長の桜井武雄先生)という方針が効を奏しているのだろうか。しかしあとでみると、なんと下村さんも山田さんも、入学試験のときは「学費全免」で通ったという優等生。「グレード制によって出来る子はどんな実力を伸ばすことが出来る」という模範なのかも知れない。いずれにせよ、厳しい制度も学生の精神的負担となっていないとすれば、学生同士、また先生と学生同士のつながりがフランクで、健康的である証拠とも思える。

「総合芸術大」のよさ

もうひとつ、総合芸術大学ならではの良い面は、美術や建築、舞台芸術といった他の学科の学生たちと交流ができることである。一

楽用の録音機材、テープなどが並ぶスタジオ内はまるで放送局か宇宙ステーションのよう。元NHKのチーフだった塩谷教授が指導に当たり、電子音楽の制作、演奏、ミキシング操作などを身につけることができる。これだけ本格的な設置を備え、音楽工学を専門に指導しているところは日本でも他に例がないそうだ。「音楽のわかるミキサー、プロデューサー、ディレクター」として、卒業生も放送や録音関係の仕事で活躍しているという。この学科はさすがに男子が多いが、口を揃えて「すごく面白い」と目を輝かせている。

「何といっても、まだまだ新しい大学ですから全ての点で試行錯誤をくり返し、カリキュラムも年々新しくなっていますし、あらゆる意味で建設上といえるでしょう。まだ未熟な点も確かにありますが、逆に言えばかたくななところはない。これから悪い因襲のようなものはつくりたくないですね」という天野先生の言葉が、そのままこの大阪芸術大学の現在の姿を要約しているようだ。確かに先生の側にも、学生の側にも、これから自分たちが何かをつくって行くんだ、という張りを感じられる。「のび盛りの良さ」を充分持つ大学、とも言えるだろうか。それはもちろん一人一人の音楽にも反映されるにちがいない。

ピアノの練習、といつてもそれぞれ各人各様。「最良の方法」などあるわけはありません。有名になったピアノリストでも学生の間は日に2時間、時には全くピアノに見向きもしなかった、という人もあるほどです。でも、ピアノリスト目指して四苦八苦、同じ悩みを持つ仲間の勉強ぶりをのぞいてみるのも興味深いことでしょう。今回は堺市に住むTさんに日記を公開して頂きました。Tさんは東京の音大をめざして勉強中。浪人一年生です。

6月9日

今日は月3回通っている東京の先生のところでのレッスン。1時からソルフェージュ。3時からピアノ。8時46分新大阪発のひかり号にとびのワザもこのころは熟達した。高校の頃は学校が終わってから新幹線をつかまえ、夜遅くなるとそのまま東京で一泊、ということもあって大変だった。東京に

通いたての当時は、東京弁がキツくきこえて、本当に自分がバカなんじゃないか、と思われたけれど(大阪だと「なんでそないな弾き方するねん」という具合だから)、その言葉にも最近は見事に勝てた。
A先生のところでバツハの平均律1巻の14番とベートーヴェンのソナタ7番を見てもう。バツハはむづかしい。「ただ弾くだけ」じゃなく、いろいろ考えないといけないので大変だ。リストなんかだと、好きで割合とすらすら弾けるのだけれど。今日も「左手のアクセントはつきり」と注意されっぱなし。帰りは5時48分の新幹線。

6月10日

バツハの練習曲を中心に練習。わたしは何でも納得するまでに時間がかかって、ふつうの人よりも進み方が遅いようだ。多いときで1日9時間、平均6時間ぐらいの練習量だけれど、他の人はどれくらいやっているのかしら。バツハの平均律の他に、フーガとプレリュードもさらって夜1時半までかかった。

6月11日

毎日毎日ピアノに向っていると精神的にも肉体的にもまいってしまふ。毎週水曜の午後は近くのアーチェリー・レンジへ通うことにしている。もともとスポーツは好

わたしのレッスン法



●一日弾いても苦にならない

堺市のTさん

の弟は被害者意識にもえてるらしい。「頭がいたくなる」と時おり爆発する。まあ、あと10か月あきらめてもらいましょう。

高校のときは、試験間近にしか一生懸命にならなかったけれど、今は一日中弾いても苦にならない。ピアノって、やればやるほど奥が深く、これでいい、ということがある。それがわかってくると逆にピアノが面白くなってき

た。それに、他のことはあまり考えず、ピアノだけに神経を集中させて勉強できるって、いいことだと思う。最近そんな風に思うようになってのは、ひとつには東京にレッスンに通い始めたせいもある。東京と大阪と、教え方が違うので勉強

6月14日

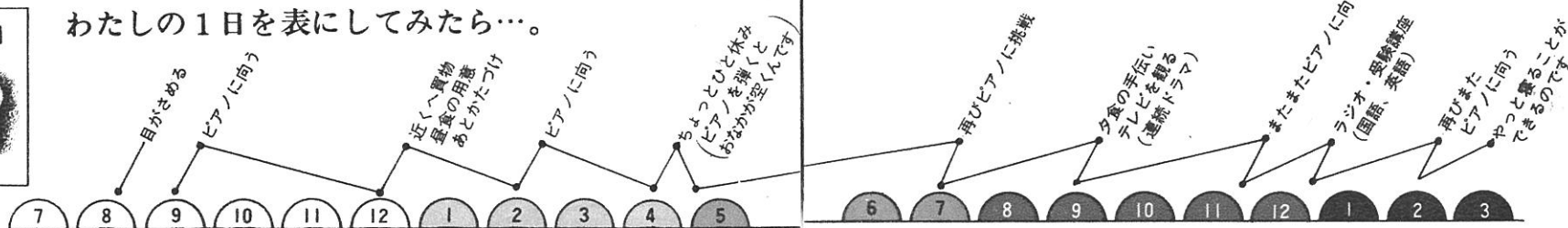
ベートーヴェンのソナタに挑戦。家は裏がお店で、誰もいなくなるし、向い側は電々公社でふつうの住宅ではないので、夜遅くまで弾いていてもうるさがられない。その点は恵まれている。ただし、フ

になる。大阪だと全体的にまとめるように教えるけれど、東京ではこまかいところをきっちり仕込んでくれる。ソルフェージュも大阪ではハーモニイと和声を別々に教わっていたが、東京ではこのふたつを関連づけて教えてくれる。間に合せてはダメ」とヒシヒシ感じ始めたのも東京に行くようになってからだ。

6月15日

日曜は家で「寝る日」と決めているので私もお昼頃までぐっすり。この時とばかり、日頃の睡眠不足をおぎなう。久しぶりの「かぐや姫」と「NSP」のレコードをかけてホッとした気分。さあ、バツハ氏とベートーヴェン氏に対面しよう。

わたしの1日を表にしてみたら…



6月13日



Wシリーズ、好評

ヤマハピアノにWシリーズが誕生してからこれ一年になる。このWシリーズ、外装に、それぞれ個性をもった天然木化粧板を使ったしやれたピアノで、現在、ローズウッド、アメリカンウォールナット、チーク、ミンディ、オークの五種類でている。

発売当初、販売店の人の中には、ピアノは黒いものなのにこんなピアノ、果して売れるだろうか、という不安があったというが、い

ざフタをあけてみると、これがなかなかの評だった。待ってました」という感じで買った人が次々と現れたのである。

ピアノを購入する人は、三十代から四十代前半にかけての、親子四人家族といった家庭が多いのだが、奥さんが黒のピアノに決めかけている時、ご主人が、購入の決定に加わり、黒をやめさせてWシリーズにしたという例が案外多い。一般的に考えれば、インテリア好きの女性の方が生地仕上げピアノを選びそうだが、想像とは裏腹に女性の方が色彩的に保守的なのかも知れない。

エンビツカクレオンか

中にはこんな例もしばしばあった。両親は明るいWシリーズがいつべんに気に入る、もう置く部屋とピアノの色のつり合いなどに想いをよせながらあれこれ相談し、最後に、ピアノの使用者となるわが子に向って「これにしようね」と念を押すと意外にも「イヤ！」という答えが返ってくる。当然のことながら両親は「どうして？」と聞いてみる。するとその答えは決まってしまうのである。「お隣の

利果ちゃんと同じのじゃなくちゃイヤ！」両親は驚き、かつ残念に思い、「こつちの方がきれいでいいよ」とわが子の説得にこれ相つとめるのだが、子どもの意思は石よりも硬く、といって未来の弾き手の意向を無視するわけにもいかず、遂には押し切れられ、やむを得ず黒にする、というわけである。

売場の人の話によると、こんな時は無理押ししないことが肝心で、たとえば「エンビツとクレオンで書いた絵じやどっちがきれい？」「クレオンよ」「それじゃ色のついたピアノの方がきれいでしょ」などというように、できるだけ具体的に話すと、子どもは案外あっさり納得するという。

「ご両親に申しあげておきたいことは、お部屋にマッチしたピアノをお求めになりたいのであれば、あらかじめお子さまの考えを聞いてからいらつしやるといいですね。もつともこの頃では、お子さまの方が生地仕上げがいいという例もすいぶんございますが、時々ご夫婦、あるいはご両親とお子さまのご意見が分れて私ども困ってしまう場合がありますね」とベテランのセールスマンは語っている。

黒のイメージをかえる

ところで実際買った人の評判はどうだろうか。愛用者カードの中には次のような意見が多い。

「部屋が明るくなった」「エレが勉強ということでも楽しくピアノに向かう」「家具とマッチしてインテリアの役目も果たしている」といったものから「黒のように汚れが目立たなくていい」といった意外な効用を述べているものまである。

W101、W102は前面にトーンエスケープ



「部屋が明るくなった」「エレが勉強ということでも楽しくピアノに向かう」「家具とマッチしてインテリアの役目も果たしている」といったものから「黒のように汚れが目立たなくていい」といった意外な効用を述べているものまである。

W101、W102は前面にトーンエスケープ

アップライトの新境地をひらく UX

この五月から新しい設計のヤマハアップライトピアノUXが発売になっている。このピアノ、「アップライトピアノの音の限界を追求した」というのがうたい文句だが、特に専門家の間で評判がすこぶるいい。

グランドのような音色とタッチ

たとえば、先日、レニングラードフィルハーモニーとともに来日したソ連の若手ピアニスト、アレクサンドル・スロボジャニク氏は、東京滞在中ホテルオークラに宿泊したが、ここで練習用に使ったのはヤマハのUX。スロボジャニク氏はこのピアノがいっぺんで気に入ってしまい、次のような感想をもらしている。



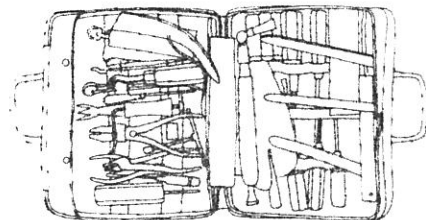
アレクサンドル・スロボジャニク氏

「ずいぶん大きく見えるピアノですね。このアップライトは音色とタッチが、グランドピアノにみたいた。音が鮮明でタッチに手ごたえがあつて、とにかく大へん良いピアノですよ」

音色とタッチがグランドピアノにみたいたと

いうのはスロボジャニク氏だけではない。日本楽器銀座店には大学の先生方や音楽を職業とする人たちがよく訪れ、展示してある。新しいピアノをいじってみるのだが、異口同音にスロボジャニク氏と同じような感想を語っている。「いい和音がでる」「静かなメロディを弾くとき音がよくのびる」「アップライトの常識をくつがえした」「ピアノシモからフオルテシモまで繊細に受けとめてくれて、思うように鳴る」「イメージどおりに鳴ってくれる」「音がダイレクトに出てくる」等々。

こうした言葉、決して特においしい点だけを選んで抜き出したわけではない。疑問に思われるむきには、是非一度、もよりの楽器店で試弾してみることをおすすめする。



精巧にできているピアノは、耐久力も強くよほどのことがない限り、いたんだり壊れたりもしませんが、木と金属とフェルトという敏感な材料を使用しているため、保管の仕方でも長い期間ではずいぶん違いがでます。できるだけ長く、良い状態でピアノを保つために、家庭でどんな点に注意したら良いか、ベテランの調律技術者にアドバイスをお願いしてみよう。今回は大阪の日本楽器で調律を専門になさっている方々にうかがいました。

Q ピアノの音がおかしい、とふつうの人でも判断する方法はあるでしょうか。

●ふつうの場合は、まず難しく、音叉でもないとわかりませんね。とても微妙ですから。レコードをきいて、音程がおかしい、という方もいらっしゃると思いますが、これはレコードの方が回転数の関係でノーマルな音程とは違っている場合が多いです……。でも極端にわかるのは中音部に近いところですね。ひとつの音に弦が3本張られています。この弦の伸びが一本、本違ってくる、バラバラに振動するようになって音にうなりが生じてしまうんです。

ピアノが納入されて一年以内の間は、音程がくる易く、調律も繰返しする必要がありますが、大好きですから。防錆と防虫をかねた保護剤も市販されています。乾燥剤をピアノに入れておくのも良いでしょう。

虫くい、もよくありますけれども「米どころ」と言われる地方では、ネズミがピアノの中に入って（アップライトだとベダルのところ）に穴があいてますから、そこからもぐり込むんです。内部の木やフェルトをかじってしまふ、なんてこともあるんです。尼ヶ崎のある音大生の例ですが、納入後、間もないピアノを、ふたを開けっ放しにしておいたためにネズミが中に入って、鍵盤から内部から、木の部分をすっかり食べられてしまったと嘆いていたことがあります。

Q 置き場所の注意としては？

●直射日光や外部の湿気の入りやすい場所はさける、というのは当然ですが、調律の側から希望したいのは、ピアノの右はしをびったりに壁につけてはおかすに、壁から30cm位離していただきたい、ということですね。あるお宅で、押入れを改造して、そこにすっぽりピアノをはめ込んでいらしたのですが、壁にびたりついていて、調律がしにくくて、困りました。調律には左手でオクターブをとり、右手でチューニングハンマーを持ちます

ますが、それ以後でしたらそんなにいいません。それにしても最低年一回は定期的に調律（というより点検ですね）をするようにぜひ心がけていただきたいと思っています。定期調律をすることによって、ずいぶんピアノも長持ちするようになりますから。

ピアノの大敵は？

Q

●ピアノの状態はもちろんピアノを使用する頻度、部屋の温度や湿度によって差がでます。なかでも気をつけていただきたいのは湿度ですね。さびの原因になりますし、ひどくなるとアクションが動かなくなつて、キイを打っても音が出なかつたり、音がこもつてきたりします。また、過乾燥も音に悪い影響を与えます。できればピアノのあるご家庭では湿度計を一台用意していただくというですね。標準湿度は大体55%から75%ですから、それ以上になつたら除湿機を使うとか、反対にそれ以下になつたら加湿機を使うとか、反対にそれなり、観葉植物を置くとか。大きな観葉植物にはたつぷり水をやりやすから、乾いた所では具合がよいんです。

ほこりもなるべくつかないようにするのが望ましいですね。ほこりがあると虫がつきやすくなつて、虫はハンマーのフェルトなどが

から、右手の方に余裕が欲しいわけですね。

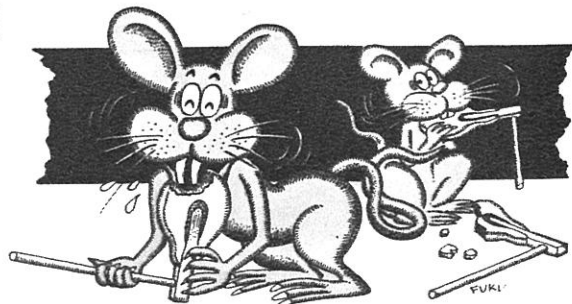
それとピアノの納入される前に、そのサイズに合わせて、ピアノの上の方に棚を吊つてしまわれる方もいらっしゃるんですが、それもピアノのふたが開けられる位のスペースを考えていただきたいですね。

畳の部屋にピアノを置かれる場合ですが、畳は床に比べて柔らかくて安定が悪いですが、敷板を下に敷きます。さらにピアノの裏側（アップライトの場合）とうしろの壁との間にぎつちりと雑誌か新聞紙をはさんでいただくとしつかり安定します。いちど、ふすまを背にしてピアノを置いてあるお宅で、調律しようにも、全体がふかふか動いてやり難かつたことがあります。

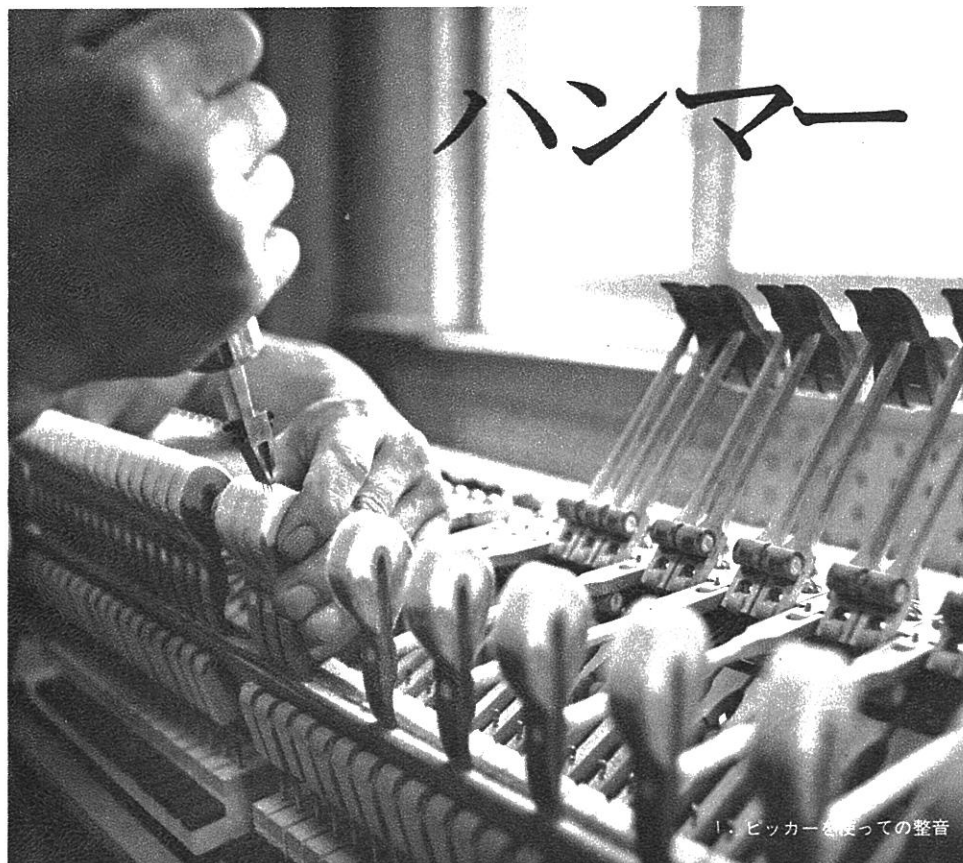
他にお気付きの点は？

Q

●良く手入れされているピアノは、目で分ります。クリーナーでよく拭いてピカピカに光っているピアノ（クリーナーを使うと表面に薄い皮膜ができて、こまかいきずがつきにくいという利点もあります）と、手あかがついたままのピアノ、とでは調律するにも張りあいがちがいますね。手入れが行き届いている、というのはそれだけ可愛がって使っていたにいて、ということですから。



ハンマー



1. ピッカーをばったの整音

「ハンマーメーキングはscienceではなくてartである」とは、イギリスのある著名なフェルト会社の社長のことばであるが、実際にはハンマーメーキングにもサイエンスの介入する余地はある。ただ、殆ど気の遠くなるような研究が必要なので、このことばは、それを避けて通るための弁解として言われたのかも知れない。にも拘らず、このことばはやはり「名文句」と言える。ハンマーメーキングには、実のところそんなふうには呼びたくないような面がなくはないのである。

たとえば、ここに調律技術者の七つ道具の一つであるピッカーという道具がある。木でできた握りの先に針三本を固定したものが、この至極簡単な道具でハンマーヘッドを数回さしてみる。するとピアノの音は、耳のよくない人が聞いても明らかに変化する。まして耳のいい人が聞けばその違いは歴然である。しかもこれは、ハンマーの微妙さを示すほんの一例にすぎない。

ハンマーだけがピアノの音色を決めるわけではないのだが、ハンマーが最終的なピアノの音にかかわる度合いは、私たちの想像を越えて大きい。そして未だ謎に包まれた部分が多く、技術者の探求心を駆り立てずにはおかぬ。いまハンマーは、現代の高度な科学技術と、人間のもつ鋭く繊細な感覚の、いわば

“not science but art”

音

への配慮

ピアノ室の遮音を
考えていらつしやる方へ

東京にサウンドコンサルティング
ルームができました。



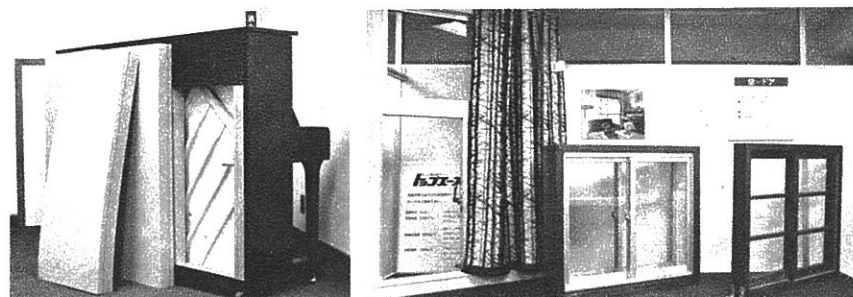
東京は銀座の日本楽器東京支店があるパールビル4階に「日本楽器サウンドコンサルティングルーム」ができました。ここはほぼ遮音資料相談室。ピアノ室を外部の騒音から遮断したり、ピアノの音を外へ出さないようにするにはどうすればいいかお困りの方は、是非一度相談においてになることをおすすめします。

ここには、ピアノにとりつけて、ピアノそのものの音量を下げるピアノテックスや防振インシュレーター(ゴムで振動を吸収するようにしたピアノの敷物)、そして各種の遮音材の見本が展示してあるほか、本格的な遮音室と簡易遮音室のモデルルームがあります。

これから遮音を行なおうという方には施工業者の紹介も行なっていますが、知り合いの建築士や大工さんに依頼する場合には、同道された方がいいようです。

遮音をそれぞれのお宅の事情に応じて効果的にこなすには、材料の選択や方法を誤らないことが肝心です。遠慮なくご相談下さい。

東京地区以外では、遮音等のご相談は、各支店の技術課が承っています。





ハンマーにハンマージャックをさし込む



3. フェルトのシーズニング



2. フェルトを細長く切り分ける

ハーモニによってつくられているといっている。今回は、このハンマーの不思議な生態を探ってみることにしよう。

単純な構造、難しい製作

ハンマーは、ハンマーウッドという芯になる堅い木に、羊毛を圧縮した良質のフェルトを巻きつけて作る。これにハンマーシャンクという細い棒を取りつけ、アクションに組み込めばそれででき上がり。ハンマーの構造は一見してわかるように至極単純である。

しかし、構造の単純さはそのまま製作の容易さを物語るものではない。全般的につくるのがむずかしいピアノの部品の中でも、これほど苦心のいるところはないのである。たとえば、どのようなフェルトをいかにしてうまく巻くかがハンマーメーカーの要なのだが、非常に高度な技術が要求されるためこのメーカーでも極秘にしていることから、そのむずかしさの一端はわかるだろう。

羊毛とのたたかい

その昔、フェルトの代わりに鹿皮が使われていた時代があった。一九世紀の中頃音量増大の要求に応じて羊毛でできたフェルトが登場したわけだが、これはピアノにとって実に素晴らしい改良であった。フェルトのハンマーは、何万回という打弦にも形や弾力が変わりなく、その上弾き手の好みに合せて音色を

微妙に調整できたからである。これは最近のことだが、ヤマハでも研究の一環としてたとえば化繊を使った実験をやってみたというが、目下のところ羊毛のフェルトに代わるものは考えられないという。

フェルトの材料となる羊毛の毛は、葡萄酒などと同様とれた場所や年により、繊維の長さ、太さなどその性質が異なっている。どんなに良質なものであっても、このバラつきのある羊毛を理想のフェルトに仕上げるのは大変だ。繊維は一般に長いものが良いとされているが、フェルトにするには長い繊維だけではいけないし、といって短い繊維だけでもいけない。それらを適度にミックスし、繊維が縦、横、上下の三方向にうまく絡むよう縮充させてフェルトにする。長短の割合、三方向のバランスは、長年の研究の結果ようやく編み出されたものだという。

こうして羊毛の毛は、約一メートル平方、一八一九ポンド（八・一八・六キログラム、ヤマハの場合）の原反と呼ばれるフェルトになる。原反はシーズニング（外気の変化になじませる）を経た後、細長く切り分けられ（写真2参照）一四〜一六台のピアノのハンマー材料になる。（図1）裁断の次は防虫加工で（ハンマーウッドに近い色のついた部分）、これが済むと湿度、湿度を一定に保った部屋に五〜十日間置く（写真3参照）。これはハンマーができ上った時の音をよくするための大切な工

たフェルトを巻きつけるだけなのである。しかし、一見ふわりとしているように見えるフェルトも、三五ミリという厚さにもなると、実に曲げにくいやっかいなものになってしまう。

そこで、およそ一〇トンにも及ぶ力加えながら、フェルトをハンマーウッドに向かって圧縮する。ハンマーウッドには硬い木が使われているが、これはこの時加わる力で、変形したり縮んだりしないためである。

さて、この時やたらに強い力を加えればいかというところではなく、ハンマーウッドやフェルトを損なわずに、というより理想の重量、形状、弾力をもつように圧力を加えなければならぬのである。これはすぐれた機械、最適な温度と圧力、そして人間の勘があつて初めて可能になることである。その辺が秘伝中の秘伝と言われる所以なのである。

ハンマーづくりがむずかしいことのもうひとつの理由は、改良の際の方向性を明確にできないことである。様々な原反を用い、様々な加工法を試み、実際に出る音と対比しながら実験を繰り返すのだが、しかしこうすれば良い音になるという計算がむずかしく、因果関係をつかめるのは「入口と出口だけ」という様なものだそうである。というのは、完成したハンマーの物理的特性を測る器具がなかったというためもある。現在一般にはハンマーの硬さをゴムの測定器で測っているが、これで

理想の重量、形状、弾力に
いよいよハンマーメーカーのクライマックスである。
その原理は、第2図に示すようにすこぶる簡単である。ハンマーウッドに、台形に切つ

新しい音の発見

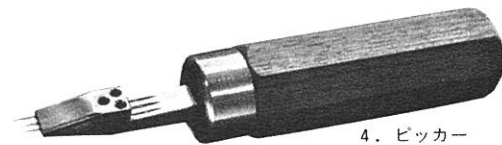
YAMAHA
日本楽器製造株式会社

ヤマハアップライトピアノ

UX

新製品

ヤマハピアノの
最高峰をゆく
アップライトです。
ひととき冴えた音色、
素晴らしい音ののび、
そして何よりも豊かな表現力。
アップライトピアノのイメージを
変えるピアノです。



4. ビッカー

は表面付近の硬さは測れても肝心の内部の硬さまでは測ることができない。ヤマハでは、内部の硬さまで測れる測定器の開発に成功し、現在ハンマーの秘密は徐々に明らかにしつつある。

本体とのマッチング

しかしそれでもなお、これが絶対というハンマーの基準はない。もし敢えて基準を設けるとすれば、「ピアノ本体によくマッチするハンマーが良い」ということになってしまふのである。

ここで、ごく荒っぽい言い方をすれば、フェルトの品質のほかに重量と弾性の組み合わせが、ハンマーの決めてになる。たとえば、中央左寄りのAの音の振動数は一秒間に四四〇回だが、この弦がハンマーを打つ理想的な時間は八八〇分の一秒、つまり(密に弾き続けると)一秒なのである。この時、ハンマーのエネルギーはいちばんよく弦に入っていく。しかし、先程から繰り返し述べているよう

図-2

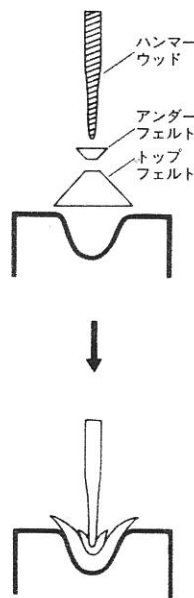
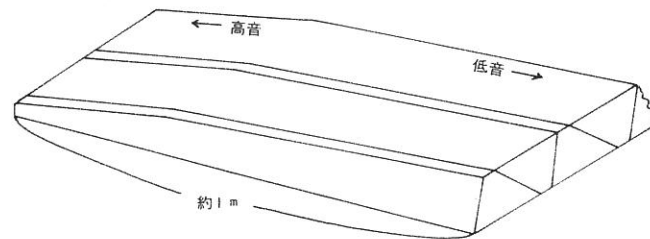


図-1



に、ハンマーメーカーの段階で、表面から内部までフェルトの弾性を計画通りコントロールしてつくるのは非常にむずかしい。いや不可能といってもよい。ただフェルトを巻いたままだと、たとえばピアノニッショで弾いた場合にはいい音がでたとしても、フォルテで弾いたときは倍音構成が変わって金属的な音になる。

だが、どんなふうにしても理想的な状態につくるのが不可能だとしたら、一体どうすればいいのか。手はあるのである。最初にお話したように、例のビッカー(写真4参照)でハンマーをさしたり、ヤスリをかけたたりしながら、ハンマー内部の弾性を微妙に調整することによって、ハンマーと弦のマッチングをよくし、全音域でピアノニッショからフォルテニッショまで美しく鳴るようにすることができるのである。これを整音と呼ぶのだが、この作業に当るものは、熟練だけでなく「いい音」に対する洗練された感覚をもっていなければならない。

ここで断わりしておかなければならないのは、整音は大変重要な作業だが、いくら整音をよくしても、そのハンマーがもっている可能性以上のものをだすことはできないということである。つくる段階がすべてうまくいき、整音をしなくて済めばそれが理想なのである。それは大変遠い道だが、技術者の夢は、この理想に一步でも近づくことなのだ。